

豊島氏と行基伝承

——『平塚明神并別当城官寺縁起絵巻』を糸口に——

はじめに

豊島氏は武蔵国豊島郡を名字の地とする武士団で、桓武平氏系坂東平氏の一流である。坂東平氏とは桓武天皇の曾孫にあたる平高望が関東の群盗鎮圧のために上総介として下向し、それを契機に坂東に広まった一族である、といわれている¹⁾。豊島泰盈²⁾「豊島系図」によれば、高望王の流をくむ将恒（将常）が秩父を本拠として秩父氏の祖となり、その長男武基が秩父氏を継ぎ、弟の武常は豊島氏・葛西氏の祖と記されてその子近義は豊島太郎、弟常家は豊島次郎と称されていることから、この代で豊島氏を名乗ったことになっている³⁾。また、中条家文書「桓武平氏諸流系図」には良文―忠頼―恒将―武恒―常家―康家と続いて、康家に豊島三郎と記されているところから、この康家を豊島の祖とする見方もある⁴⁾。

その豊島氏に関する縁起絵巻の一つに『平塚明神并別当城官寺縁起絵巻』（略称）がある。河内源氏が後三年合戦（一〇八三―八七）で奥州に赴いた帰り、現在の北区平塚神社あたりに居を構えていた豊島氏が饗応したため、その返礼として十一面観音と具足一領を授けたという伝承が記されており、時代背景は豊島太郎近義の代あたりである。本縁起絵巻には十一面観音が行基作であるとも、饗応した豊島氏が近義であるとも明記されていないが、九カ月後に出来た『略縁起』にはそれらのことが明示されている。豊島氏に関連した行基伝承は他にも見いだされ、本稿では関東における行基伝承を探る一環としてこの絵巻を糸口にして考察していきたい。なお、この縁起絵巻の全容は写真版にて詞書の翻刻とともに澤登寛聡氏により詳細に報告されている⁵⁾ので、それを参照して論を進めたい。

(一) 書誌と成立

正式名は『武州豊嶋郡平塚郷上中里村平塚明神の社并別当城官寺縁起』⁶⁾とあり、平塚神社（北区上中里一―四七―一）の所蔵するものである。平成三年二月二三日付で東京都北区有形文化財に指定された。平塚神社は豊島太郎近義の館跡とされているところで、絵巻に記されている義家下賜の鎧を平坦な塚にして埋めたところから、この地名がついている。

形状は上巻、中巻、下巻と内題のある三巻の軸装でいずれも縦は三三・九センチ、横は上巻一八五・九センチ、中巻六八四・五センチ、下巻一八三・〇センチ。中巻が極めて少ないのは詞書だけで絵がないからである。

表紙は紺の絹地に金糸の葡萄唐草文を織り込んだ裂の表装で、本紙の料紙は鳥の子紙である。

詞書の撰者は下巻の詞書の最後に「元禄五年壬申夏五月／現住城官法印真惠謹記」とあることから、撰文は城官寺住職だった真恵と考えられる。城官寺歴代住職の墓石によると、真恵は享保三年（一七一八）閏十月二二日に没し、その墓誌には次のように刻まれている。

當寺中興法印真惠／生国常州鹿嶋町／栗林兵庫秀次嫡子／七十一歳寂／法印真栄嫡佛也／当寺一大法印□惠／敬白／享保三戊戌檢閏十月廿二日⁷⁾

つまり、常陸国鹿嶋郡鹿嶋町の出身で栗林兵庫秀次の嫡子、前代の住職真栄（貞享二年十月二一日没）とは法弟の関係にあったため、その後を継いだものと理解される。後述する『略縁起』が元禄六年（一六九三）二月に制作されていることを併せても、本絵巻の完成は元禄五年（一六九二）五月と確定して矛盾はない。

米山孝子

絵師については上巻第六段の絵に「北越士狩野信良書」、下巻第五段の絵に「北越士狩野信良筆」という落款と朱印があることから、澤登氏は『古画備考』を調査されて、狩野幸信の次男、狩野察信の画系に連なる狩野信良を想定されたが、察信が享保一七年（一七三二）六月一日に狩野を名乗ることを許されて時代が下がるため、その画系に連なる信良とこの絵巻の絵師とを同一人物とすることに即断されていない。同時に同じ画系の生良に「狩野與左衛門、松柏婿 仕光長公」とあり、信良にも「同」と記されている。延宝八年（一六八〇）の『越州士分限帳』には生良（狩野與左衛門）は絵師として十人扶持の禄を支給されているので、信良にも記されている「同」を生良と同じく松平光長公に仕えた絵師であると理解すれば、五人扶持を支給されている狩野與六という人物を信良に当てると時代的にも矛盾は生じないが、澤登氏は慎重を期して今後の課題にされている。

（二）『平塚明神并別当城官寺縁起絵巻』の構成と内容

上巻の冒頭は次のように平塚三社明神の由来から始まる。

抑も平塚三社の明神と申奉るは、中は八幡太郎義家朝臣、左ハ賀茂次郎、右は新羅三郎を齋ひ奉る、此は人王七十四代鳥羽院御宇、元永年中にはしめて此處に鎮座まします元永元年より元禄五年也 其由来を尋ね奉るに、清和天皇六代の孫、伊豫守源頼義朝臣に三人の公達おはします、嫡子八幡太郎義家、鎮守府將軍從五位下出羽守になり給ふ、御次男賀茂次郎義綱ハ左衛門尉、御三男新羅三郎義光ハ兵衛尉より刑部丞にうつり給ひ、館刑部丞殿と申奉り、共に朝家の守護として目出度さかへさせ給ふ

この頼義親子三人の前九年の役（一〇五一〜一〇六二）における武勲を語っているのが上巻の内容にあたる。

後冷泉院の時に、奥州の阿倍頼良が国司に反抗して御政に従わないため、頼義朝臣を陸奥守鎮守府の將軍にして義家・義綱を派遣させると、頼良は名を頼時と変えて頼義軍を迎え入れたが、子供の貞任・宗任はなおも反乱を続ける。頼義は味方についていた頼時の女婿藤原永衡を内通者とみて謀殺し、子供との間を仲介しようとした頼時にも流矢に当たって鳥海城で死亡する。貞任・宗任を攻めるが苦戦を強いられた頼義は、

出羽押領使清原真人・武則の援軍を得て厨河の城で果敢に戦い、ついに貞任を殺害し、降伏してきた宗任を捕らえて、康平六年（一〇五九）の除目で頼義親子は冒頭のごとき官位に預かる。上巻の最後は、

右天喜二年より康平五年にいたるまでを、頼家前九年の戦要を取り、是を補ひ、当社縁起の序并巻の一とする乎⁸

と終わっている。絵は朝廷から阿倍頼良征伐を命じられる頼義親子に始まり、頼義一行を出迎える頼時（頼良改め）、貞任・宗任との合戦場面、貞任の首と宗任とを都に護送する場面等が描かれている。

中巻は前述したように絵はなく詞書だけで構成され、内容は後三年の役における義家の活躍である。最初の段は上巻の内容を受け「かくて頼義・義家都へ帰り給ふ、義家・義綱御兄弟は御逗留あり、城主豊嶋の某、大によるこひ、みやつかへし奉る」と帰路に豊嶋氏の城に立ち寄ったことが記され、これを契機に宮仕えしたとある。

前九年の役から二十余年後、出羽国司兼鎮守府將軍に義家が任命されたことに納得しない武則の二人の子、家衡・武衡征伐に義家が金沢の城に進軍する。兄義家の苦戦に兵衛尉三郎義光が職を辞して都から駆けつけるが、なかなか敵は手強く落城しない。味方の兵も疲れ果て、策を巡らして兵士を鼓舞するがそれも効を奏せず、結局兵糧攻めをすることになった。結局は義家が落城を予言したその日に、ついに金沢城の食料も尽き降参した。

その直後の「時は人王七十三代堀河院、寛治五年十一月十四日なり」と続く文章に、割注で「元禄五年まで五百九十五年なり」とあることから、この撰文の時期が元禄五年であることが再度確認される。中巻の終わりは、

右寛治三年よりの軍功、其誉れ勝る故か、彼仁を崇め、是を祭り、郡城の鎮守し、是以て社例伝記之神道と云矣

と、後三年の役の軍功を称えて「郡城の鎮守」としたのが平塚明神であろうと書き収められている。中巻全体は様々なエピソードで綴られているがすべて割愛した。

下巻は奥州からの帰路、再び豊島氏の平塚城に立ち寄り、その饗応に感謝して鎧一領と守本尊の十一面観音を授けた話に始まり、豊島氏滅亡のあとは平塚城を蘆坂兵庫頭秀次が領有したこと、その後阿弥陀如来を背負ってきた修行僧が常住するもまたもや荒廃し、出世した山川檢校城官による当社再興の実現等、時に真恵自身も登場させながら、平塚明神・城官寺の変遷再興の過程が記されている。

まず、下巻の巻頭部分の記事を示しておく。

かくて出羽・奥州しつまりぬ、されは其後頼朝大軍を起し、平家を討給ふ時も、関東の諸侍おほくは源氏の御家人と名乗て、付したかひける事も、ひとへに義家朝臣の餘慶にてそありける、然るに義家・義光御兄弟、都へのほり給ふ時、又平塚の城に御逗留あり、城主豊嶋なにかし、もてなし奉る事斜ならず、義家はなはた、其忠誠を感じ給ひ、御鎧老領并御守本尊十一面観音の像、豊嶋にたまはりてのほり給ひぬ、豊嶋氏ふかく是をあかめ、以て家の宝とす、其後十餘年ありて、長治二年乙酉八月十八日、義家朝臣御逝去あり、後十四年、鳥羽院元永年中、豊嶋氏かつうは我子孫、此よろひを着するに堪ざる事をおもひ、且は、城の鎮守となさんかために、城内清浄の地に、此よろひを埋み、其上に塚をつき、以て是を表しぬ例にならざる塚の其塚のかたち高さからさるを以て、地を平塚と名付る、其塚猶具足塚とて今にあり、豊嶋氏又、義家・義綱・義光の武功をおもひ、且其遺風をしたひ、且は武運をいのらんために、そのかみ三人やとり給ひし処を点して社を立、影像をおさめ、時に及んて是を祭る、今の平塚三所の明神、是なり、

上・中巻の内容を受けて義家・義光の功績を讃えるとともに、彼らから賜った鎧を義家亡き後は城内の清浄な場所に埋めて塚を築き、また、義家・義綱・義光の遺風追慕と武運祈願のために、逗留した場所に社をたてて三人の影像を奉納した、その場所が絵巻制作時点の現在にも具足塚、平塚三所明神として残っている、ということである。謂わば、平塚明神・具足塚の由来を語る場面である。

豊島氏の衰退後は蕪坂兵庫頭秀次が領有し、社や塚を修理し礼典を欠かさず行つたことで本人も没後に社の外に埋葬されて石神明神と祭られ、水旱・疫病には靈験あらたかであった。具足塚の鎧は源氏重代の八領の鎧の一つであったせい、この塚のあたりに白蛇が出没する。今住持している真恵自身、三所の御影を拝せんと社を開けてみると、影像は朽木になりはて一眼の白蛇が七重に巻いていた、これは明神の化身か鎧の精霊であろう、と真恵の感慨が語られている。

また今安置している阿弥陀如来は、中頃筑紫安楽寺の僧が六十六部のお経を納めるため廻国していた時、この社の傍らにあった小庵に一宿し、翌日出立しようとして背負っていた阿弥陀像を持ちあげてもまったく動かないため、結局庵主にこの小庵を譲られてここに安置したものである。しかし、これも歳月の移るにつれ寺社ともに荒廃していった。

寛永時代に入つて、平塚の里出身の山川檢校城官が立身出世を祈つて平塚明神に詣で、その願いが成就し征夷大将軍の家光に近侍するようになった。家光公御病気の折に城官がこの明神に祈願すると病は回復し、その神恩に報いんがために当社の再興を計画する。

城官は幹事を与楽寺の寺主に任せて、社の修理と安楽寺の跡に寺を建立し、当社の別当として祭供をまかせた。寛永一七年九月二十三日、家光公が御遊のついでにここに立ち寄り、山川檢校城官がこの社・寺の再興に努めたことを知り、御感のあまり社領五拾石、城官には知行貳百石、安楽寺は号を改め平塚山城官寺安楽院と三号を賜つた、家光公は時々この近辺に御遊、城官は子孫繁榮して幕下に仕えている。是ひとえに平塚明神の冥助によるものである。末尾は、

宜哉、垂迹は源家の元祖、東夷征伐の功、赫々たり、本地は釈門の教主、西方極楽の粧ひ巍巍たり、誰か歩をはこはざらんや、

元禄五年壬申夏五月

現住城官法印真恵謹記

と、平塚明神の靈験を讃えて終わっている。

絵の方は、義家・義光が豊島氏に鎧一領と守本尊の十一面観音を下賜している場面（絵巻の紙背の人物部分に、「義家公、義光、豊嶋太郎近義」という書き込みのあることが指摘されている）、それに繋がつて鎧を納めた平塚と社が描かれている。次の真恵が大勢の人々に見られながら社を開廟している場面には、社の中の影像に白蛇が巻き付いているのがかすかに見え、また社の後方には白蛇が這っている。これが詞書に言う「明神の化する所か、又彼よろひの精霊か」にあたるものであろう。三場面目は、宿泊した廻国僧が阿弥陀仏を背負おうとしてもびくとも動かないところ。四場面目は城官が平塚明神に出世を祈願している。次の場面は出世した城官が社と寺を修理建立している。最後に家光公が御遊の折に再興された平塚明神に立ち寄り、それを城官が平伏しお迎えしている場面であり、ここには家光公の駕籠や馬、家臣の行列一行が所狭しと描かれている。

以上、縁起絵巻そのものの考察に視点をおかないため、平塚明神の由来とその変遷を語る縁起絵巻の詞書と絵の様相を簡易に紹介してきたが、詞書の典拠や絵の時代反映等の説明は澤登氏の論文において詳細を究め、撰文の真恵の墓碑銘に關しても、また絵師の信良に關しても、稿者はその資料や墓碑を再検証しただけである。絵の背景

に描かれている襖絵の和歌の出典や盲者山川城官貞久の調査もゆるがせず、悉皆調査の研究にただ頭が下がるばかりである。詳しくは澤登氏の論文を一読されたい。

(三) 『略縁起』

縁起の本体が完成した元禄五年五月から九ヶ月後、『略縁起』が制作されている。板木も現在平塚神社に所蔵されており、澤登氏の報告によると縦二五・七センチ、横三四・七センチ、厚さ二・三センチとあるので、今のB四版をわずかに小さくした位の大きさである。かつて某博物館で、下巻第一段の鏝と守本尊を豊島氏に下賜する複製絵を見た時、「行基作の十一面観音像云々」という説明文があったため、『豊島氏編年史料I』の扉に写真版で掲載されている同場面を何度も読み返したが、行基作とはどこにも記されていない。後に『略縁起』の本文にそのことが記されていることを知って疑問は氷解したが、同時に伝承の流通過程のようなものも了解された。後出の伝承で前代のものを解釈する場合もあるのである。

一般的に略縁起というと、本縁起を忠実に縮小簡略したものと考えがちだが、本縁起絵巻の場合、多少の付加脚色がある。短いので、澤登論文に写真版で掲載されている『略縁起』を拡大して、現在三枚残っている『略縁起』とを照合した本文を次に提示してみる。

畧縁起
抑 平塚大明神之由来奉尋 八幡太郎義家賀茂次郎
義綱 新羅三郎義光 此御三人 三社明神奉齋 比者
仁王七十四代鳥羽院之御宇 元永年中 豊嶋之
城主 豊嶋太郎近義自作也 是者 奥州阿部貞任
宗任并家衡 武衡退治 御歸陣之時 豊嶋之城 御逗
留有 御具 足井 御守 本尊 十一面 観音 給 則
行基菩薩之御作 御長七寸 近義是 奉崇 城之清
地 御具足埋 社建 御三人之御影納 依去 于今具足
塚申 社之後 有哉 在時者 森木間 二丈余之白蛇顯

又 有時者社地龍燈揚事度々也 神明之靈驗新而
諸人之願滿事難量盡 本地阿弥陀如来申奉 筑紫
安樂寺之中尊 赤梅檀 御長一尺 毘首羯磨之作也
則 臺座瑪瑙玉座 中頃 安樂寺之住僧 廻国修行之
砌 此寺旅宿 異哉 如来盤石之如而 不動 依之庵主本
尊 附屬 其唯坎庵安樂寺号 緒有 寛永比 新而城官
寺名 不思儀哉 神佛共權化也 誰人是敬ザランヤ

元禄六年酉二月 日

平塚山 城官寺

一読して分かるとおり、本文は真名書であるものに読み仮名が付されているので、平仮名の読めるものには縁起の内容が理解できるようになっている。これは多階層に及ぶ参詣者への配布目的で作成されたからであろう。縁起の本体は平塚明神及び城官寺の由緒変遷を記録する価値ある宝物として継承されていくが、その価値を一般に流通させるには略縁起が有効である。

『略縁起』は本体と性質を異にするため、平塚明神及び城官寺の靈験を全面に打ち出している。まず、平塚明神を祭ったのは豊嶋太郎近義である、と縁起本体には明らかにされていない。また、豊嶋氏の名前があげられている。義家・義綱・義光の垂迹した平塚三社明神には二丈余もある白蛇が顕れたり、度々龍燈が上がったりすることを神明の靈験と語り、今の城官寺の本尊阿弥陀如来はかつて筑紫の廻国修行僧がこの地に旅宿した時、背負っていた阿弥陀如来が岩のように動かなくなったことここに安置することになった本尊であると、神仏の不思議を強調している。それを「不思議なるかな、神仏共に権化なり」と、明神も阿弥陀仏も人々を救うためにここに在しているのだからどうぞ皆さん参拝して下さい、という宣伝になっている。参拝者を誘うために、上中巻にわたる源氏一族の華々しい戦歴や、下巻における徳川家光公に庇護された山川検校城官の再興譚は、思い切った捨象しなければならなかったのだろう。

さらに、宗教的権威を高めるために、二つのことが脚色されている。一つは義家から給わたった守本尊の十一面観音が「行基菩薩の作」であり、もう一つは安樂寺の住僧が背負ってきた阿弥陀如来が「毘首羯磨の作」となっていることである。いずれも縁起本体にはそのことは明記されておらず、略縁起の段階で付加された作名である。

毘首羯磨とは帝釈天の命を受けて建築や彫刻を司る天神であるから、適当につけたにしては理にかなっている。行基作というのも、後述するように江戸期には造仏伝承や開基伝承が関東にも広まっているので、潤色としてもそれほど違和感はない。ただそれでも、なぜ行基よりも伝承率の高い空海作や他の人ではないのだろうか、という疑問が残る。源氏もしくは豊島氏と行基伝承を結びつける時代的な要因は考えられないであろうか。

(四) 武蔵国周辺・国内における行基伝承

かつて、平成九年発行『行基事典』(国書刊行会)別冊の『行基ゆかりの寺院』に収録された一四二七カ寺の行基伝承寺院を、開基と造仏伝承とで地方・県別に統計をとったことがある。開基寺院は行基の活動した地域だけあつて上位三県は兵庫県(八五)、大阪府(七九)、京都府(四五)であつたが、造仏伝承の上位三県が神奈川県(七六)、兵庫県(六六)、新潟県(五三)と関西以外が入っていることに驚いた。その両方を含めると行基伝承寺院(開基も造仏も両方あるものは一カ寺と数える)の上位三県は兵庫県(一二二)、大阪府(九九)、神奈川県(八九)であることから、神奈川県に多い行基伝承の原因を考えざるを得なくなった。歴史史料的には行基の活動は畿内に限られているのである。

また、併せて伝行基作の仏像の種類も統計を取ってみると、総数でいくと上位三体は観音(三七七)、薬師(二二六)、阿弥陀(一五八)であつた。行基の生きた時代は観音信仰の盛んな時代であり、薬師信仰も全国の国分寺に薬師を据えたことからこれらは納得のいく仏像であつたが、三位に阿弥陀仏がきていることは意外であつた。奈良時代の行基の活動事跡からは、浄土信仰は見えてこない。ちなみに四位は地藏が六七体と、数字は三位の半分以下になる。

伝承自体は時間をかけて調査をすれば伝承事実の内容を示すことはできるが、その要因を探ることは意外と難しい。行基伝承を研究されている根本誠二氏は、やはり東国における行基伝承の多さに注目され、その拡散の大きな契機として、源頼朝が源平の戦乱で焼失した東大寺大仏の再興に米一万石、沙金一千両、上絹一千疋を寄進して協力している(『吾妻鏡』文治元年三月七日条)ことから、「(行基)菩薩の聖跡を旧

儀に復せんと欲す」(『南無阿弥陀仏作善集』)と、行基追慕の念を持つて事業推進にあつた勸進上人であつた重源と接することによって行基像を知るようになった。その後、相模国の行基創建の大倉観音堂(杉本寺)や日向薬師(宝城坊)の伽藍修理に寄進や参詣を行ったり、あるいは相模国内の寺社の開創の由来を調査させたこと等が、行基開創伝承や行基造立の本尊安置の伝承を擁する要因につながつていったのではないかと推測されている¹¹⁾。

ちなみに『行基ゆかりの寺院』の神奈川県には、薬王寺(横浜市磯子区洋光台)に聖武天皇より疫病平癒祈願を命じられて彫刻した薬師如来を東大寺に奉納したものを、後に源頼朝が鎌倉に迎えて安置したという伝承と、最宝寺(横須賀市野比)に、建久七年(一一九六)頼朝が創建の際に京都より行基作の薬師如来を勧請して本尊としたという伝承が掲載されている。

五来重氏によると、全国的に広がっている信仰や伝承には全国を巡り歩く勸進聖や、各地の霊山を拠点に神仏一体の信仰を教え広める修験者たち、あるいは廻国そのものを生活の標とせざるを得ない八百比丘尼たち等、謂わば聖たちの活動によるものと捉えられているが、この『略縁起』が作成された元禄五・六年頃までに、武蔵国での行基ほどの程度の知名度であつたのであろうか。

時代は文化七年(文化十一年(一一八〇)〜一一八八)と成立は下がるが、『新編武蔵風土記稿』の豊島郡に掲載されている寺社所蔵の仏像で作者が明示されているものだけを調べてみると、次のような結果であつた。

行基作

正光寺(岩淵宿)正観音／阿弥陀堂(袋村)阿弥陀仏／西福寺(豊嶋村)
阿弥陀仏／清光寺(豊嶋村)不動尊・釈迦堂の釈迦／観音寺(豊嶋村)
観音／専称院(豊嶋村)地藏／城官寺の光明院(上中里村)十一面観音／王子権現社別当金輪寺(王子村)金輪仏頂／正受院(滝野川村)
阿弥陀／無量寺の阿弥陀堂(西ヶ原村)阿弥陀仏／昌林寺(西ヶ原村)
正観音／与楽寺の阿弥陀堂(田端村)阿弥陀／観音寺の観音堂(浮間村)観音 一四体

空海作

王子権現社別当金輪寺(王子村)正観音・観音塑像・地藏塑像・五大尊／稻荷社(王子村)馬頭観音銅像／薬師堂(王子村)薬師／金剛寺(滝野川村)不動・弁財天・松橋弁天(石像)／正受院(滝野川村)不動

／与楽寺（田端村）地蔵／東覚寺（田端村）不動 一二体
恵心作 王子権現社別当金輪寺（王子村）炎胎地蔵／正受院（滝野川村）阿弥
陀／無量寺（西ヶ原村）不動・正観音／東覚寺の九品仏堂（田端村）
阿弥陀仏 五体

以空作 王子権現社別当金輪寺（王子村）釈迦・薬師・正観音 三
春日作 正光寺（岩淵宿）本尊阿弥陀仏／円勝寺の勢至堂（中里村）勢至菩薩 二
泰澄作 静勝寺（稲付村）観音堂の十一面観音 一
慈覚作 円勝寺（中里村）阿弥陀仏 一
最澄作 白鬚社（田端村）御神体 一
聖徳太子作 光明院の薬師堂（田端村）薬師 一
毘首羯磨作 城官寺（上中里村）阿弥陀仏 一

まず、この『新編武蔵風土記稿』の記録によつて、義家下賜の十一面観音は傍線部に示したように、この時点では城官寺の光明院に納められていたことが判明する。鏝は塚として祀られていたが、守本尊の方は縁起絵巻にその後の記述がなかった。さて、数の上では行基一三カ寺一四体、空海七カ寺一二体と伝承の広がりの上では両者に大差はなかったが、統計をとりながら気になったことは、行基の造仏にはいろいろの伝承が付属していることである。六阿弥陀（西福寺・無量寺阿弥陀堂・与楽寺阿弥陀堂）、その木余りで作った末木の観音（昌林寺）、七仏（清光寺・専称院）、袋村の阿弥陀では若狭の八百比丘尼の伝承が語られている。豊島郡はこの平塚明神及び城官寺の所在する地域でもあるので、この地域の行基伝承の実態を知る上で次にそれらの記録の一部を列挙してみよう。

（袋村）

阿弥陀堂 行基作ノ弥陀ニテ、若狭八百比丘尼ノ看病仏ト云フ、今ハ別ノ像ヲ作テ、其腹籠トス、近キ年マデ、堂ノ前ニ、彼比丘尼ガ植タル古松アリシトナリ、安養寺持

ここにおける行基仏は八百比丘尼にて伝承されたものようである。比丘尼たちが廻国先で由緒を語るには、特定の宗派や大寺院開基の僧侶の作と語るよりも、民衆のために布施屋や橋、灌漑施設等の社会活動で弱者に知られた無宗派の行基が都合がよ

かつたのであろうか。

（豊嶋村）

専称院 浄土宗、小石川伝通院末、亀島山地蔵寺ト号ス、本尊阿弥陀、外二行基ノ作レル地蔵ヲ安置ス、縁起ノ略ニ、豊嶋左衛門清光、志願ノコトアリテ、行基ト諷リ、豊嶋郷ノ内ニ、七ヶ所ノ堂ヲ建テ、仏像七軀ヲ彫刻シテ安置ス、此地蔵ハ其一ナリ、外六軀ハ、西福寺阿弥陀・清光寺不動・同キ境内釈迦・観音寺観音・其余二軀ハ、今堂宇廢ス、此寺当時ハ地蔵堂ニテ、専称庵ト号セシヲ、宝永二年、村民四郎左衛門ト云者、祐天僧正ヲ帰依シ、当庵ヲ興隆センコトヲ願ヒシニ、祐天其志ヲ感ジ、遂ニ一寺トナシ、山号等ヲ命ジテ、伝通院末トナセリ、故ニ祐天ヲ開基トス、其頃ノ住僧ヲ、正参順應トイヘリ、清光ト行基年代齟齬セシコトハ、既ニ西福寺ノ条ニ弁ゼリ、本堂ニ祐天開眼ノ地蔵ヲ置、又祐天ノ与ヘシ、百万遍ノ数珠ヲ蔵ス、其魁首ノ珠ニ、祐天自ラ弥陀ノ名ヲ鐫ス

清光寺の不動・釈迦、観音寺の観音には行基七仏の一つという説明がある。後述する西福寺の条で説明されている六阿弥陀の伝承にあやかつたのか、次掲の昌林寺のよいうな阿弥陀仏を作つた時の末木で作つた観音というものまで出てきて、一つのことから派生して新たな伝承が産出されている。後に述べる足立区性翁寺の「木余りの阿弥陀」というのもその一つであらう。

（西ヶ原村）

昌林寺 禅宗曹洞宗（中略）本尊正観音ハ行基ノ作ニテ、六阿弥陀彫刻ノ時、同木ノ末木ヲ以テ此像ヲ作りシユヘ、末木ノ観音ト号スト云、昔ハ本堂ノ造リモ莊嚴ヲ尽セシニヤ（以下略）

（豊嶋村）

西福寺 新義真言宗、足立郡沼田村恵明寺末、三縁山無量寿院ト称ス、本尊阿弥陀ヲ置ク、是世ニ所謂六阿弥陀ノ一ナリ、縁起ヲ閱スルニ、聖武帝御宇、当国ノ住人豊嶋左衛門清光、紀伊国熊野権現ヲ信ジ、其霊夢ニ因テ、一社ヲ王子村ニ建立シ、王子権現ト崇メ祀レリ、然ルニ清光子ナキヲ憂ヒ、彼社ニ祈願セシニ、一人ノ女子ヲ産ス、成長ノ後、足立少輔某ニ嫁セシガ、奩具ノ備ハラザルヲ以テ、少輔ニ辱カシメラレシカバ、彼女私ニ逃レ出、荒川ニ身ヲ投テ死ス、父清光悲ニ堪ヘズ、是ヨリ仏教ニ心ヲ委ネシガ、或夜霊夢ニ因テ、異木ヲ得タリ、折シモ行基当国ニ来リシ故、清光其事ヲ告シニ、行基即チカノ異木ヲ以テ、

六躰ノ阿弥陀ヲ彫刻シ、近郷六ヶ所ニ安置シテ、彼女ノ追福トセリ、故ニ是ヲ女人成仏ノ本尊ト称ス、当寺ノ本尊ハ、其第一ナリ、次ハ足立郡小臺村、第三ハ当郡西ヶ腹村、第四ハ田端村、第五ハ江戸下谷、第六ハ葛飾郡亀戸村ナリト云、此説モトヨリ妄誕ニシテ、信用スベキニアラザレド、当寺ノミニアラズ、残レル五ヶ所トモニ、少ノ異同アレド、皆縁起ナドアリテ、世人ノ口ニ伝ル所ナレバ、其略ヲ記シオキヌ、且清光ハ権頭ト称シ、治承ノ頃ノ人ナレバ、行基トハ時代遙ニ後レタリ、中興ノ僧宥海、延享三年六月八日寂ス、境内ニ延慶三年ノ古碑アリ

西福寺は長い引用になってしまったが、これが『新編武蔵風土記稿』採録時点での六阿弥陀伝承実態である。この伝承を再調査すると傍線部の六阿弥陀伝承寺院は掲載文献によってまちまちである。これらの行基造仏伝承が『平塚明神并別当城官寺縁起絵巻』の略縁起制作時点の元禄六年（一六九三）まで遡れるならば、豊島氏との関連で登場する行基を源義家下賜の十一面観音の作者として付加させたことも理解できることになる。

(五) 豊島氏と六阿弥陀伝承

六阿弥陀伝承については、既に関係地域の研究者や学芸員による多くの蓄積がある。北区在住の塚田芳雄氏は六阿弥陀関係寺院の縁起や史料を紹介され、それらを受けて『北区史』通史編近世には、従来の様々な角度からの論述を踏まえて、六阿弥陀詣の成立状況が概括されている¹⁶。また足立区側から論じられた六阿弥陀伝説の報告には、豊島氏と足立氏との縁戚関係図が示され、さらには『木余如来略縁起』を発行している性翁寺と宮城氏との関係史料も提示されて、中世の六阿弥陀伝説形成の背景と諸相が詳細に論じられている¹⁷。ここではそれらを踏まえて、この行基作と言われる六阿弥陀伝承と『平塚明神并別当城官寺縁起絵巻』の『略縁起』制作期とが重なるのか否かを確かめてみたい。

『北区史』通史編近世の概説によると、六体の阿弥陀仏を拝する功德を初めて説いたのは、浄土宗の立場から阿弥陀信仰を六阿弥陀詣での形をとりながらわかりやすく説明した、明暦年間（一六五五～五八）版行の『六阿弥陀伝記』であるという。内題に「一心六阿弥陀女人悟道鑑」とあり、娘菩提のために熊野で光明木を見つけた沼田

某の「我が娘成仏いたすべき木ならばこの木我が本国に流れ行けとて海に切り入れ給えば、これ女人成仏の流灌頂となりて、沼田殿未だ武蔵の国に帰らぬに六阿弥陀の光木は沼田の川に着きにけり」（第一巻）という願いが叶い、六阿弥陀を彫刻する。

この部分を大正大学所蔵『一心六阿弥陀女人悟道鑑』(『六阿弥陀伝記』)によってもう少し詳しく見ていくと、二巻目の目録の「一、六阿弥陀武蔵国に立給ふ由来の事」該当部分に、六阿弥陀が武蔵国に設立された理由が次のように記述されている。

扱此六阿弥陀の武蔵の国に立ち給ふ根本を尋るに、沼田と申侍獨り娘を持給ふ成り。川を隔て豊嶋と云ふ在所へ縁につき年月を送り給ひ心も打とけり、在る夕のつれづれに互ひの物語の上にて豊嶋殿、北の方へ向ひて申けるは、其方の親沼田殿は二共なき獨り聲に引手物を仕給ふとて、かゝる見苦き物を給はる事は我等を賤しめ給ふか、又家に傳はる寶もなきか、此一腰は土民百姓もかかる物をば婿の引手物には出されまじ、一城一家を守る大将とも思はれず、心のおこがましやと、北の方に姑の事をのゝしり給ふ、姫君は聞し召一家の惣領共生まるゝ身の女性たりとも心は男子に劣るべきか、我男子にて在らば人もいふべからず、我も言はせまじ、女性の身は浅間しや、かかる事を目前に聞て居る身の因果の浅間しやと思召、親里へも帰らず姫君を初め供の上臈五人主従六人の人々は沼田川へ身を投て、花の姿も散り果て給ふ事哀れ也、

(20才～20ウ)

川を隔てた結婚にて、引出物の不備をなじられて投身入水した姫君の親が、以下菩提提供養のために熊野詣で発見した夜なく、光る光明木を海に流し、沼田の川に着いたその神木で諸国巡礼の行基が阿弥陀を制作するという展開になっている。

其折節に行基菩薩は諸国修行の其為に武蔵の豊嶋に仮の宿りを仕給ふ、彼光明木の光りか、やきて見給侍也、其木の由来を御尋る由を沼田殿聞召、初め終りを行基に御語り在りて、今の六阿弥陀を作り給ふ物成り、此道理を以て六阿弥陀は女人成仏・親子の因果の罪科を消滅するの阿弥陀成り、殊に此阿弥陀に参詣の女人は成佛の流れ勸請を阿弥陀と熊野の権現を頼みていたす道理也 (21才)

先の引用と右の傍線部分にある「流れ灌頂」とは水によって罪穢を浄める仏事のこととで、特に水死者や妊産婦死亡、水子供養に行われる。一般的には、板塔婆に経文や陀羅尼、名号などを書いて水中に流すのだが、ここでは、その働きを熊野の光明木が代替している。罪穢浄化を担った神木で阿弥陀が造られ、それが女人成仏、救済への道に通じていくことの強調と、もう一点、繰り返し「六阿弥陀参り給へば熊野権現に

参詣と同じ功德成り」(第一巻7才)と記されているように、阿弥陀信仰が熊野信仰と一体になっていることの強調である。

そのことに及ぶためにも、先にこの『六阿弥陀伝記』に端を発する入水説話の諸相を確認しておく、前節の西福寺の縁起内容を見てもわかるように、入水する女性が沼田某の一人娘であったり、豊嶋清光の一人娘であったりと、主人公も嫁ぎ先も異なっている。塚田芳雄氏や塚田博氏の論文、『北区史』通史編近世にこれらの異同が一覧表にまとめられているので、それらを参考に改めて検証した私版を次に掲示しておく。

【六阿弥陀縁起の異同】

寺院名	父親	娘・入水者	嫁ぎ先	出典
六阿弥陀	沼田と申す侍、沼田殿	一人の娘 共の上臈五人	豊島という在所 豊島殿	六阿弥陀伝記 (明暦間一六五五〜五八刊)
六阿弥陀	足立の長者	女子・侍女	豊島の長者	六阿弥陀略縁起 (文政八年、一八二五刊)
1番西福寺	豊島左衛門清光	一人の女子	足立少輔某	新編武蔵風土記
2番延命院	豊島郡沼田村の庄司	一人の女子 婢女	隣村	新編武蔵風土記
3番無量寺	足立庄司従二位 宰相藤原正成	足立姫 侍女二人	豊島左衛門尉清光	無量寺縁起(刊記不詳)
4番与楽寺	武豊島の郡主 庄司左衛門清光	一人の女子 婢女五人	豊島郡足立の豪家 沼田治部少輔	与楽寺縁起 (安永九年、一七八〇再版)
5番常楽院	足立の長者	女子・従婢五人	豊島の長者	常楽院縁起(刊記不詳)
6番常光寺	足立の長者	娘・侍女	豊島の長者	常光寺縁起 (文政八年、一八二五再版)
木余性翁寺	足立の庄司宮城 宰相	一人の姫 二人の侍女	豊島左衛門の尉	木余如来略縁起 (享保一一年、一七二七刊)

※①塚田芳雄「六阿弥陀」論文 ②『北区史』通史編近世 ③『新編武蔵風土記』 ④足立区立郷土博物館所蔵

右の一覧表によると、1沼田の娘が豊島氏に嫁するもの、2足立の娘が豊島氏に嫁するもの、3豊島氏の娘が足立に嫁するもの、と大きく三パターンに分けられる。だ

が、これらの縁起で共通していることは、いずれも父親が熊野権現の信仰のもとに霊木に出会っていることである。塚田芳雄氏の論文から二・三、六阿弥陀寺院の縁起より熊野参詣部分を引用してみよう。

『無量寺縁起』(刊記不明)

庄司是を甚愁ひ悲嘆のあまりに、姫ならびに十二人の侍女菩提のため、諸国の霊場を巡拜し、紀州室の郡熊野権現に参籠し深く十三人の菩提を祈願するに、不思議や夢中に霊木を授かる。神勅に曰く、汝此霊木を以て佛像を造らば、女人等成佛疑なしと、告玉ふに依て山中を尋るに、宮の東谷間遙に光明赫々たり、近付見れば、杉の大木なる倒木を得たり。庄司敬して思へらく、是こそ権現より授かる処の霊木なり。早く我本国に流着べしと祈誓して、人夫を入れて熊野浦へ挽出し、我姓名を記して海中に差出し去ぬ。

『与楽寺縁起』(安永九年再版)

父の庄司悲嘆のあまり彼の亡女等が為に、諸国の霊場を巡拜して紀州熊野山登詣せし道路に一樹の霊木ありて光明を放つを見る。庄司思ふて是偏に當山権現の本地阿弥陀如来の影向し給ふならんと、則此霊木をもつて弥陀の尊像を彫刻せんと願心を発し、願くは當山権現ならびに、本地阿弥陀如来像我願心を哀愍納受し給はば、此霊木百有余里の蒼海を流れて我本国沼田浦に着せし給へと海中に投げけるに不思議や、彼霊木本国沼田浦に着て夜毎に光を放つ。

『常光寺縁起』(文政八年再版)

足立の長者、これをかなしみ娘并侍女の菩提のために諸国の霊場を見めぐり、紀州牟婁の郡熊野権現に参籠して霊夢を蒙り、霊木を得て弥陀の尊顔を彫刻せんと願を発し、願はくは當山権現本地阿弥陀如来像我願をみたし給はば此霊木己が本国沼田の浦に流れよるべしと祈りしに、不思議に此木百有余の波濤をへて本国沼田浦につき夜毎に光を放つ。

以下、どの縁起も諸国修行に行脚していた行基に、流れ着いた霊木で六阿弥陀の彫像を依頼したという展開は共通している。それが観音や薬師ではなく阿弥陀であるの

は、傍線部に示されているように、熊野権現（本宮）の本地が阿弥陀如来であったからである。また、女人成仏が説かれているのも、他の霊山が女人の入山を禁制しているのに対し、熊野は女人の登山にも開かれていたため、父親が吉野や白山、高野山ではなく熊野で亡き女性たちの菩提を阿弥陀に発願したのも由縁のあることであった。

豊島氏と熊野との関係は北区に王子神社や紀州神社、飛鳥山の地名に名残りが見られるように、古く平安末期、豊島氏が紀伊国守護人に補任されて以来熊野三山への関心を深め、次第に参詣組織において熊野の御師と師檀関係を結ぶようになったと言われている²¹。北区飛鳥山博物館の企画展『遠くと近くの熊野 中世熊野と北区展』(平成一八年一〇月)の図録によると、熊野那智大社蔵の嘉元三年(一一三〇五)の藤原長実旦那売券や貞治元年(一一三六二)の武蔵国豊島郡郷山王宮住僧等旦那願文、あるいは文安五年(一四四八)の熊野領豊島年貢目録等多数の史料が掲載され、熊野那智山と豊島郡との関係の深さが示されている。

王子権現社の縁起(『新編武蔵風土記稿』巻之十八²²)には、康平年中(一〇五八〜六五)に八幡太郎義家が奥州征伐の時、当山で金輪仏頂の法を修しているのだから前前から勧請されていたのだろうとか、文保・元弘年中には豊島氏が修造した、というようなことも記されている。

ところで、『六阿弥陀伝記』の段階では六阿弥陀の寺院はまだ確定しておらず、寺院名があがっているのは四番に「田端の余楽寺」とあるだけである。一番が「豊嶋の辻村」、二番が「沼田の阿弥陀」、三番には「西ヶ原に立給う」とあって、五・六番にはふれられていない。

『北区史』通史編近世では、『六阿弥陀伝記』の版行が六阿弥陀寺院開設の契機になったのではないかと提起されている。先の西福寺には「本尊者武州豊嶋郡六阿弥陀第一番」と刻まれた石灯籠が一对あって、万治三年(一六六〇)八月に豊嶋村長福寺が本願主、十島村鈴木三郎兵衛と上野通町江戸川勝右衛門が願主となつていて。ということ、この万治三年には六阿弥陀の寺院がそろつていた可能性があることになる。

また、六番常光寺に残っている延宝七年(一六七九)造立の名号塔には、正面が「南無阿弥陀仏」の名号、右側面には「自是六阿弥陀道」、左側面には「延宝七巳未年二月二十五日／江戸新材木町同行六十人」と刻まれていることから、この時には既に六阿弥陀詣の始まっていることを示している²³。

六阿弥陀の所在地がそろつて明記されている最初の記録は貞享四年(一六八七)作

の『江戸鹿の子』である。「老番 豊嶋郡本木 三縁山長福寺／式番 沼田村 甘落山延命寺／三番 西ヶ原 仏宝山長福寺／四番 田端村 宝玉山与楽寺／五番 下谷 延命山長福寺／六番 亀井戸 浄光寺²⁴」となつている。

これらの記録によって、江戸の六阿弥陀詣が一七世紀の中期頃には始まつていたとなると、『略縁起』のできた元禄六年(一六九三)段階ではもはや行基の名は人々の間には広く知られた状況であつたと言える。よつて、豊島氏との関係で縁起つけられている六阿弥陀の行基造仏伝承を、下賜された十一面観音の作者に転用しても不自然ではなく、むしろ『略縁起』の方で積極的に利用したのではないかとさえ思われてくる。

(六) 熊野と行基伝承

行基の造仏伝承で一番が観音、二番が薬師、三番が阿弥陀の順に多いことはすでに述べた。源義家の守本尊が十一面観音であつたことは、戦闘に参加する武士にとつて修羅道の救済する仏として納得のいくことであり、また、入水した娘たちの菩提を供養する仏として阿弥陀が彫られているのも、話の展開としては了解できることである。あとは、熊野で感得した霊木を彫像したのがなぜ行基となるのか、という伝承の問題である。江戸期における空海伝承との比率を『新編武蔵風土記稿』の豊島郡に限って見てきたが、行基一四体、空海一一体と大差のないことも分かつた。それでも、まだ空海ではなく行基なのかという疑問が残る。

六阿弥陀伝承寺院に影響を与えたと思われる『一心六阿弥陀女人悟道鑑』(『六阿弥陀伝記』)には、一巻の目録に「行基菩薩の事」「行基母上の事」とあり、その該当箇所には行基が文殊化身であること、智光が行基を妬んで地獄巡りをさせられたこと、東大寺完成の前にバラモン僧正が来日して、行基と和歌を贈答したこと、母親が薬師女と言い母を大事にしたこと等の説話が記述されている。ここに載っている行基が母親の代わりに多くの田を瞬時に植えたこと、母の最期まで孝養を尽くしたことは、『行基大菩薩行状記』等に見えて人工に膾炙した話でもある²⁵。

しかし、文殊が「三世の仏の母」(『心地観経』)であるから、この仏の化身である行基が六阿弥陀を造つて我らを救済するのだ、あるいは「三世の仏の母」である文殊がいなければ我らは仏の世に出会うこともないのだと言う論法の繰返しだけで、阿

弥陀との深い関わりが論じられているわけではない。

そこで、伝承率の高い弘法大師空海に目を転じてみると、空海の造像伝承には阿弥陀が少ないという統計結果に注意が及ぶ。齊藤昭俊著『弘法大師信仰と伝説』の分析結果を参考にすると、造像伝承一二四三話中観音菩薩が二二〇、不動明王が二〇五、地藏菩薩が一六二、薬師如来一二五、弁財天九七、以下大師自像、毘沙門天、阿弥陀如来、大日如来、愛染明王の順であった²⁶。空海の思想からは単純に阿弥陀信仰へと結びついてはいないようである。

一方、行基伝承の造像伝承のありようを見ていくと、彫像や安置場所が石窟や岩上・岩壁という結構困難な場所の例が多くあり、これらには山岳修験行者が関わっているのではないかと想像させるものがある。実際に、熊野信仰と重ねて行基の造仏が縁起つけられている寺院が八カ寺あるので、次にそれを『行基ゆかりの寺院』からそのまま抜き書きしてみる。

○清浄院（山形県村山市楯岡馬場）

阿弥陀、薬師、観音像の三軀を刻し岩上の堂に安置。これらは熊野権現にならない岩上三所権現と称された。

○西光寺（埼玉県南埼玉郡宮代町東）

春、巡歴中の行基が当山で熊野三所山王白山の夢託を受け、堂塔を建立。天平十三年秋、阿弥陀堂や諸堂、神殿などを造立し、自作の阿弥陀、観音、勢至、不動、毘沙門天像を安置した。そのうち阿弥陀像は行基作の百体阿弥陀の中で最優秀の作であったという。行事として毎年三月に行基会が行われている。

○東観音寺（愛知県豊橋市小松原町坪尻）

勅命で東国に下向した際、昔熊野山に参詣して霊告を得たという故事にならない、当地へ赴いて海岸の山麓に祈念したところ一株の霊木得た。これをもって馬頭観音像を自刻、一字を建立して安置した。現在堂前に立つ木は、行基が本尊を彫った霊木の余材で、不朽を誓って植えたもの。

○甲山寺（京都府熊野郡久美浜町甲山）

四月、熊野信仰の篤かった行基が諸国遍歴の途中、この地に留まり伽藍を建立（行基作は阿弥陀三尊像）。

○金蔵寺（兵庫県多可郡加美町的場）

大化年間、笠形山から出現した薬師如来が熊野権現の導きで当山の大本に止まっ

た。役行者が霊告によって開山し、さらに神龜年間、行基が自作の薬師仏の胎内に霊像を納め本堂を建立した。

○鳳生寺（和歌山県御坊市湯川町富安）

熊野参詣のおり当地に草庵を建て、自刻の釈迦如来を安置して本尊とした。

あと二カ寺は、東京都北区の西福寺と足立区の性翁寺に行基の六阿弥陀の伝承が記されている。他の六阿弥陀寺院には縁起の記載がなく、これからみても記載されない縁起に熊野と関わるものもつとあることは推測できる。『行基ゆかりの寺院』の記録はあくまでも伝承実態を知る目安ではない。

行基の全国巡歴が聖武天皇の勅命となっているものが多い中で、あえて熊野との関わりを縁起に入れていることは、それだけ熊野信仰が全国的に普及していたことを示している。

したがって、豊島氏にまつわる行基の造仏伝承も、行基と阿弥陀仏や熊野との関係に必然性があるのではなく、豊島氏と熊野信仰との関わりの中で六阿弥陀信仰が普及し、その時に全国巡歴の伝承や文殊化身説が広がっていた行基に、親子の因縁・女性の救済を説く説話が付属されたものと考ええる。

結びに

『平塚明神并別当城官寺縁起絵巻』の十一面観音像が行基の造仏と言われるようになったのは『略縁起』からであったが、絵巻本体にない作者にどうして行基の名を付したのか、調査はこの素朴な疑問から出発した。

遡っていくと、六阿弥陀伝承で行基が彫像者となり知名度を高くしていることから、先ずはその影響が想定された。次に、それではなぜ行基が六阿弥陀を造ることになったのか。阿弥陀仏の像身は熊野詣の折に感得した霊木である。亡き娘の菩提を弔う供養仏としては、やはり観音よりも熊野の本地仏である阿弥陀仏がふさわしい。「六阿弥陀縁起」に登場する豊島氏または足立氏は、いずれも縁戚関係にある一族である²⁷。豊島郷には熊野の荘園領があり、また豊島氏と熊野とは師檀関係を結んで熊野を信仰している。熊野に関連する地名や神社が今なお残っているところから、熊野信仰の強い広がりが見える。

しかし、神仏一体の熊野と阿弥陀とは結びついても、行基との関係はどうなのか。全国的に広がっている行基の造仏伝承を見ていくと、行基にも熊野参詣や夢告による彫像伝承があり、岩窟や岩壁、岩上等とても修験者でなければ行けないようなところに仏像が安置されている。これらには、山岳修験者や熊野修験が伝承に関与しているのだろう。熊野信仰を伝播するものによっても、造仏する行基の名は語られていたと考えられないだろうか。諸国を巡錫する行基の登場は、山岳や廻国を修行とする彼らの姿と重なっていく。熊野信仰に篤い豊島氏の信仰を背景に、豊島氏と足立氏周辺で生じた女性入水の滅罪供養を契機に、往生へと導く六阿弥陀伝承の中にこうした行基の名が導入されていったものと推測される。

註

- (1) 諸説あるが、今野慶信「豊島氏の成立と発展」(図録『豊島氏とその時代 中世の板橋と豊島郡』板橋区郷土資料館、一九九七年)による。
- (2) 『豊島・宮城文書』所収「Ⅲ豊島・宮城氏関係系図」(豊島区立郷土資料館、一九八八年)、杉山博編『豊嶋氏の研究』(名著出版、昭和五〇年五月)巻末系図参考。また、『源威集』(『豊島氏編年史料Ⅰ』所収「史料一」豊島区立郷土資料館、一九九二年)には常家が「豊島平検仗恒家」とあることから、常家を豊島氏の祖と考える見方もある。
- (3) 『豊島氏編年史料Ⅱ』所収「史料補二七」(豊島区立郷土資料館、一九九五年三月)。
- (4) 註(1)、今野慶信「武蔵豊島氏と鎌倉葛西氏」図録『豊島氏とその時代』補説一(『板橋区立郷土資料館紀要』第一二二号、板橋区教育委員会、一九九八年)。
- (5) 「平塚明神并別当城官寺縁起絵巻の成立」(『文化財研究紀要』第6集、東京都北区教育委員会、平成五年三月)。平成元年九月から同四年七月まで、一〇回にわたって「北区の社会教育」に掲載した原稿に加筆・訂正をほどこしたものとなっている。
- (6) 北区飛鳥山博物館に委託保存されている原本で不明な箇所だけを閲覧させていたのだが、以下の書誌に関する内容は澤登寛聡氏の論文による。
- (7) 城官寺の歴代住職の墓石を拝観したが□の部分を読み取れなかった。澤登氏は契という字を当てて翻刻されている。

(8) 「頼家」では内容と相違するので原本を確かめたが、やはり「頼家」になっている。本来は「頼義」が該当するであろう。

(9) 平塚神社所蔵の『略縁起』三枚を北区飛鳥山博物館で拝見させていただいた。木版刷りの濃淡がそれぞれ異なっており、三枚を照合して振りかなの全容が確認できた。

(10) 拙稿「行基信仰と寺院伝承―『行基ゆかりの寺院』の分析を通して―」(『大正大学研究紀要』第八九号、平成一六年三月)。

表2 A 行基伝承寺院上位10

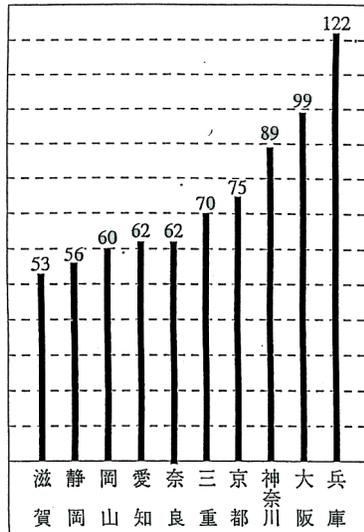


表2 B 開基伝承寺院上位10

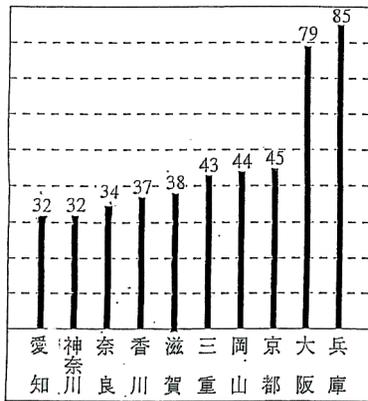


表2 C 造仏伝承上位10

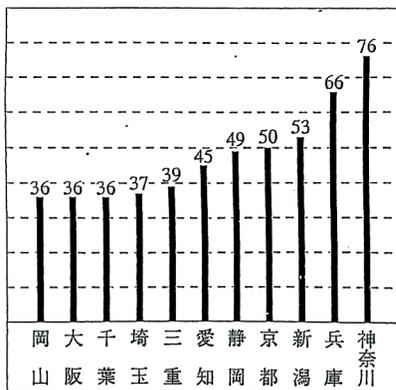


表3 行基伝承上位10

	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州	総数
観音	14	82	105	85	38	28	25	377
薬師	4	47	52	61	23	17	12	216
阿弥陀	5	33	45	49	12	7	7	158
地藏	3	15	11	22	4	8	4	67
不動	0	14	9	7	1	4	1	36
釈迦	2	2	10	10	2	8	1	35
大日	0	8	11	10	2	2	0	33
毘沙門	2	4	2	7	2	1	0	18
虚空	4	2	1	0	3	1	1	12
文殊	0	1	2	3	0	1	1	8
合計	34	208	248	254	87	77	52	960

- (11) 『奈良仏教と行基伝承の展開』「第七章第二節 相模国の行基」(雄山閣、平成三年六月)。
- (12) 五来重『増補高野聖』(角川書店、昭和五〇年六月)、同『仏教と民俗』(角川書店、昭和五一年四月)、同『日本の庶民仏教』(角川書店、昭和六〇年六月)等に繰り返し触れられている。
- (13) 『北区史』資料編近世1(北区史編纂調査会、平成四年九月)所収の『新編武蔵風土記稿』による。
- (14) 註(13)から引用。
- (15) 「六阿弥陀」(東京都北区郷土資料館「調査報告」第五号、一九九〇年三月、東京都北区教育委員会)。
- (16) 第三章第三節 江戸の札所と北区域(執筆加藤貞氏)。

- (17) 塚田博「六阿弥陀伝説と足立―伝説の背景と諸相の検討―」(『足立区郷土博物館紀要』第二二号、二〇〇一年三月)。
- (18) 題箋には「一心六阿弥陀 全」とあり、奥書には「延宝七歳末初秋吉日ノ干時文化三年寅正月吉祥日於金府写之ノ一志摩」とある。よって延宝七年版本を書写したものであると思われる。一冊、全部で九三紙。
- (19) 註(15)に同じ。
- (20) 註(17)に同じ。
- (21) 図録『遠くと近くの熊野 中世熊野と北区展』(北区飛鳥山博物館、平成一八年一〇月)第二章、第三章参考。
- (22) 註(13)に同じ。
- (23) 註(15)より引用。
- (24) 註(13)より引用。
- (25) 『続群書類従』第八輯下。
- (26) 新人物往来社、昭和五九年七月。
- (27) 註(3)論文、加増啓二「水底が秘めた記憶―隅田川周辺の伝説世界―」(図録『隅田川流域の古代・中世世界 水辺から見る江戸・東京前史』足立区立郷土博物館・すみだ郷土文化資料館・財団法人宮本記念団編、二〇〇一年)。

付記 本論文執筆にあたり、豊島区・葛飾区・北区・足立区・板橋区等の博物館や郷土資料館を回り、収蔵資料や企画展の図録をもとに学芸員諸氏よりいろいろとお教えを頂いた。また、北区飛鳥山博物館では貴重な資料の閲覧を許可して頂き、石倉孝祐氏(主任学芸員)からは手厚いご指導を頂いた。記してお礼申し上げる次第である。